

若者のプリント倶楽部（プリクラ）に対する意識

—高校生と大学生の比較から—

鳥山史織〔日本郵便株式会社〕・齋藤美保子〔鹿児島大学教育学部（家政教育）〕

Awareness of Purikura in youths

—A comparison of high school and university student's—

KARASUYAMA Shiori・SAITO Mihoko

キーワード：プリクラ、若者文化、高校生、大学生

1. はじめに

高校・大学卒業者の就職や若者をめぐる数々の困難さが続いている。例えば2012年5月の就職内定率は大学生が93.6%であるという。大学生卒業予定者（55万人）のうち、就職希望者数約38万1千人、内定者は約35万6千人で後者を前者で割っただけである。厚生省調査で高校生の場合を見てみよう。大学生と同じに求職者約16万人、内定者約15万5千人であるから、約96.9%の内定率である。大学生の場合は卒業者と就職内定者の差が約17万人、高校生の場合のその差は4万8千人である（卒業者は20万8千人である）。このように高校生・大学生ともに現実とはかなりのずれがあることがわかる。実際、就職ができず自殺に追い込まれた若者が警視庁の発表によると、07年の2.5倍の150人に増えている¹⁾。このように若者の経済的自立は大変困難なことがわかる。

他方、人格形成で重要な子どもの遊びを見てみると、その形態は変化してきている。核家族化の進行や治安の悪化、地域交流の減少などにより、外遊びからテレビゲームなどの内遊びが主流となってきた。さらに、高度情報化の更なる進展によって、インターネット・携帯電話が急速に普及した。これらの環境の変化によって、コミュニケーションを図ることが苦手な子どもや若者の増加が危惧されている。つまり、遊びを通して子どもは社会化していくことに対しても大変困難な状況であるということである。

そのような社会的変容を反映しているのが若者文化である。若者文化とは青年層に支持され、既存の文化とは異なった若者独特の文化のことで、

現在まで、クラブやルーズソックス、コギャル、ロリータファッション、ポケベルや携帯電話などの移動体メディア、プリクラなどさまざまな若者文化が生まれ、変化してきた。

本研究では、これらの多くの若者文化の中から、男女差が出るのが予想され、現在も続いているプリント倶楽部（以下プリクラ）に注目する。若者文化としてプリクラが登場してから16年が経過し、この16年の間に、プリクラは大きく変化している。次々に変化していくプリクラ機やプリクラのシステムには、その時代の実態、環境が関係していると考えられる。現代の若者の思考の傾向を知ることで、不安定な思春期にいる若者を理解し、若者を守り、若者につけさせたい力を再考できると考えられる。このことが教育内容及び教育方法を見直すことに通ずるのではないだろうか。従来家庭科教育では、このような社会的背景をもとに子ども理解・子どもの社会化—保育所設立と子どもの発達・子どもの自立（生涯発達とケア・社会保障・福祉）についての学びを行っている。とりわけ、学ぶ領域は生活や子ども（命）に関わることすべてであり、その意味では多様である。この問題解決の方法として、従来の一方的な学びではなく、授業用プリントとしてのワークシートや子どもが主権者として積極的に、提案し、表現や発信などをする等々の活動が活発化している²⁾。

以上から、本研究は、若者の興味・関心がある、プリクラをコミュニケーション、自己表現（発信）、自己開示の点から捉え、問題・課題を明らかにし、教育的提案を行うことを目的とする。

2. 先行研究

栗田³⁾は、「プリクラ・コミュニケーション」で、プリクラの社会的機能を友人確認、イベント確認、偶像収集、フレーム収集という4つの社会的機能を提示し、従来の写真撮影を継承し、それをおかた進化させた新しいメディア・コミュニケーションの形態であるとした。特にプリクラシールは、交換可能性と流通性から、コミュニケーション・ツールとしての役割も担うことになったと述べている。栗田はこれを「偶像収集」の一部であると述べている。プリクラ交換、収集においてプリクラ保有枚数は友人の多さを計る、つまり「プリクラは友人であることの証」なのである。これはプリクラの社会的機能である「友人確認」を意味するものである。

坂田⁴⁾は、「プリクラとコミュニケーション」に対する研究で、「プリクラとは人間関係という目には見えないものを可視化することのできる手段であり、自己を表現することのできるメディアであり、他者との差異を明らかにする指標である」と主張している。

プリクラを見る者はそこに写る被写体の表情や被写体同士の関係性を目にするすることで、被写体の生身の姿や性格（どんな人物でどんな友達がいるか等）を容易に想像することができる。つまり、その関係性の中にコミュニケーションがあるのであるだろうか。栗田と坂田のプリクラにおけるコミュニケーション理論を引き継ぎ、子ども目線からの研究から、若者文化を再検討することが必要と思われる。大人の規範性や大人文化から考えると、若者の文化は否定的に捉えがちである。いや、得体も知れない世界に大人はある種の不安を抱くものである。子ども目線からの研究から、今後の子どもたちの生活世界や学校教育の中で大きな意義があると思われる。

3. 調査目的・方法・調査期間

1) 調査目的

先行研究から、プリクラが人間関係を撮影という関係性の中でとらえ、プリクラ自体が「コミュニケーション・ツール」であり、さらにプリクラ交換、流通という機能を利用して、自己表現と

なっているのではないかと、これらを明らかにし、若者文化の様相を論ずることを目的とする。

2) 調査の方法

2011年11月、鹿兒島県の公立高等学校に通う高校生男女120名（女子70名・男子50名）と鹿兒島県の大学に通う大学生男女73名（女子48名、男子25名）を対象に、質問紙調査を行った。高校生を対象にした理由は、高校生がプリクラを利用する年齢層であること、プリクラという若者文化を研究していく中で、高校生の実態や意識を知る必要があると考えたからである。この上にたつて、大学生は社会的に自立している時期であり、自分の高校時代を振り返る時期であるため、対象とした。本稿では、高校時代と現在ではどのようにプリクラに対する意識が変化をしているのかを中心に大学生の意識調査を行い、分析・考察する。そのため、プリント倶楽部（プリクラ）に関する意識調査を以下4点行った。

1. 高校時と比べてプリクラに対する意識は変わりましたか
2. プリクラをどれくらいの頻度で撮りますか
3. 誰とプリクラを撮ることが一番多いですか
4. 高校時と比べてプリクラを利用する動機は変わりましたか

3) 分析の方法・視点

分析はEXCEL単純集計をし、①高校時代と大学時代の比較意識、②男女差が特にあった点を分析・考察する。

4. 結果と考察

1) 高校時に比べての様々な変化

(1) 高校時と比べてプリクラに対する意識の変化
「高校時と比べてプリクラに対する意識は変わりましたか」という質問に対して「高校時よりプリクラを利用したくなった」「高校時よりプリクラを利用しなくなった」「高校時より関心を持つようになった」「高校時より関心がなくなった」「意識は変わっていない（利用し続けている）」「意識は変わっていない（利用していない）」の6つの選択肢を設け、複数回答を求めた。

その結果、女子（N=48）では、「高校時より関心がなくなった」と回答した学生が26名（53%）、「高校時よりプリクラを利用したくなくなった」と回答した学生が8名（16.5%）、「意識は変わっていない（利用し続けている）」と回答した学生が8名（16.5%）、「高校時よりプリクラを利用したくなくなった」と回答した学生が5名（10%）、「意識は変わっていない（利用していない）」と回答した学生が2名（4%）、「高校時より関心を持つようになった」と回答した学生が0名（0%）であった（表1）。

男子（N=25）では、「意識は変わっていない（利用していない）」と回答した学生が11名（42%）、「高校時より関心がなくなった」と回答した学生が8名（31%）、「高校時より関心を持つようになった」と回答した学生が3名（11%）、「高校時よりプリクラを利用したくなくなった」と回答した学生が2名（8%）、「意識は変わっていない（利用し続けている）」と回答した学生が1名（4%）、「高校時よりプリクラを利用したくなくなった」と回答した学生が1名（4%）であった（表1）。

表1 高校時と比較したプリクラに対する意識（複数回答）

	女 (N=48)	男 (N=25)
①高校時より関心がなくなった	26名 (53%)	8名 (31%)
②高校時よりプリクラを利用したくなくなった	8名 (16.5%)	2名 (8%)
③意識は変わっていない（利用し続けている）	8名 (16.5%)	1名 (4%)
④高校時よりプリクラを利用したくなくなった	5名 (10%)	1名 (4%)
⑤意識は変わっていない（利用していない）	2名 (4%)	11名 (42%)
⑥高校時より関心を持つようになった	0名 (0%)	3名 (11%)

このように、高校時と比べて今は関心やプリクラを利用したいという意識は低くなっていることがわかる。この関心の変化は、一つには、プリクラ以外の興味が確立してきたこと、友人関係の変

化・友人自体がプリクラに関心が無いなど、自身と友人の好みなどの変化が考えられる。また、携帯電話やスマートフォンの普及など、他のメディア媒体などが取って代わられてきていると考えられる。これらの結果を裏づけるためにプリクラ撮影の頻度を見てみることにする。

(2) プリクラ撮影の頻度

「プリクラをどれくらいの頻度で撮りますか」という質問に対して「週に2回以上」「2週間に1回程度」「月に1回程度」「年に2～3回」「年に1回以下」「撮影したことがない」の6つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、女子の高校時では、「週に2回以上」と回答した学生が1名（2%）、「2週間に1回程度」と回答した学生が13名（27%）、「月に1回程度」と回答した学生が21名（44%）、「年に2～3回」と回答した学生は9名（19%）、「年に1回以下」と回答した学生が4名（8%）、「撮影したことがない」と回答した学生はいなかった。大学時では、「週に2回以上」と回答した学生が0名（0%）、「2週間に1回程度」と回答した学生が0名（0%）、「月に1回程度」と回答した学生が17名（35%）、「年に2～3回」と回答した学生が20名（42%）、「年に1回以下」と回答した学生が9名（19%）、「撮影したことがない」と回答した学生が2名（4%）であった（表2）。

男子の高校時では、「週に2回以上」と回答した学生が1名（4%）、「2週間に1回程度」と回答した学生が0名（0%）、「月に1回程度」と回答した学生が1名（4%）、「年に2～3回」と回答した学生が10名（40%）、「年に1回以下」と回答した学生が10名（40%）、「撮影したことがない」と回答した学生が3名（12%）であった。大学時では、「週に2回以上」と回答した学生が1名（4%）、「2週間に1回程度」と回答した学生が0名（0%）、「月に1回程度」と回答した学生が1名（4%）、「年に2～3回」と回答した学生が8名（32%）、「年に1回以下」と回答した学生が10名（40%）、「撮影したことがない」と回答した学生が5名（20%）であった（表3）。

表2 高校時と比較したプリクラ利用頻度【女】
(N=48)

	頻 度	高校時	大学時
1	週2回以上	1名(2%)	0名(0%)
2	2週間に1回程度	13名(27%)	0名(0%)
3	月に1回程度	21名(44%)	17名(35%)
4	年に2~3回	9名(19%)	20名(42%)
5	年に1回以下	4名(8%)	9名(19%)
6	撮影したことがない	0名(0%)	2名(4%)

表3 高校時と比較したプリクラ利用頻度【男】
(N=25)

	頻 度	高校時	大学時
1	週2回以上	1名(4%)	1名(4%)
2	2週間に1回程度	0名(0%)	0名(0%)
3	月に1回程度	1名(4%)	1名(4%)
4	年に2~3回	10名(40%)	8名(32%)
5	年に1回以下	10名(40%)	10名(40%)
6	撮影したことがない	3名(12%)	5名(20%)

表4 高校時と比較した一番多く撮影する相手

	女 (N=48)		男 (N=24) (NA=1)	
	高校時	大学時	高校時	大学時
1	友人 47名(98%)	友人 42名(87%)	友人 14名(61%)	友人 12名(50%)
2	恋人 1名(2%)	恋人 6名(13%)	恋人 7名(31%)	恋人 10名(42%)
3	家族 0名(0%)	家族 0名(0%)	家族 0名(0%)	家族 0名(0%)
4	一人で撮る 0名(0%)	一人で撮る 0名(0%)	一人で撮る 1名(4%)	一人で撮る 1名(4%)
5	その他 0名(0%)	その他 0名(0%)	その他 1名(4%)	その他 1名(4%)

このように高校時から比べると大学時代は撮影頻度が極端に減少していることが分かった。プリクラは高校生の日常に根づいていることが分かる。

(3) プリクラを一緒に一番多く撮る人

「誰とプリクラを撮ることが一番多いですか」という質問に対して「友人」「恋人」「家族」「一人で撮る」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、女子の高校時では、「友人」と回答した学生が47名(98%)、「恋人」と回答した学生が1名(2%)、「家族」と「一人で撮る」「その他」と回答した学生はいなかった。大学時では、「友人」と回答した学生が42名(87%)、「恋人」と回答した学生が6名(13%)、「家族」「一人で撮る」「その他」と回答した学生はいなかった(表4)。

男子の高校時では、「友人」と回答した学生が14名(61%)、「恋人」と回答した学生が7名(31%)、「一人で撮る」と回答した学生が1名(4%)、「その他」と回答した学生が1名(4%)、「家族」と回答した学生はいなかった。大学時では、「友人」と回答した学生が12名(50%)、「恋人」と回答した学生が10名(42%)、「一人で撮る」と回答した学生が1名(4%)、「その他」と回答した学生が1名(4%)、「家族」と回答した学生はいなかった(表4)。

この結果から、プリクラ撮影の頻度が少なくな

る理由として、友人の変化を上げたが、お遊び的な友人関係から、一つには友人間の濃密さとして「恋人」へと人間関係が変化していることがわかる。ただし、人間関係が深くかわりがある「家族」では撮影せず、むしろ家族以外の新しい人間関係を求めているということになる。

(4) 高校時と比べてプリクラを利用する動機の変化

① 女子の場合

「高校時と比べてプリクラを利用する動機は変わりましたか」という質問に対して「変わった」「変わってない」の2つの選択肢を設け、回答を求めた。また、「変わった」と回答した学生にどのように変わったか自由記述を求めた。

その結果、女子では「変わった」と回答した学生は16名（33.3%）、「変わってない」と回答した学生は32名（66.7%）であった。

「変わった」と回答した学生の内容は次の通りである（表5）。

表5 変わったと回答した学生 N=16

例	人数	高校時	大学時
1	5名	プリクラの枚数を増やしたかった（プリクラ帳に貼る、交換するため）	思い出として記念に利用している（あまり会えない人とも）
2	3名	なんとなく撮っていた	記念や思い出に残したくて撮っている（同窓会などの特別な時や記念日に）
3	2名	プリクラを撮ることが当たり前であった（遊ぶ度に遊んだ記念として）	思い出として記念に残したかった
4	1名	プリクラと一緒に撮る仲間になったら仲の良い友達という友達のステータスとして撮っていた	久しぶりに会った友達、滅多に会えない友達との記念に撮っている、ノリで利用する
5	1名	プリクラを撮りに行くのが普通であった	プリクラを撮りに行くのが特別なことになった

6	1名	記念に撮っていた	デジカメがあるため必要なくなった
7	1名	記念になる、なんとなく遊んだ流れで撮っていた	SNS に載せるため
8	1名	楽しむために利用していた	記念に利用している
9	1名	楽しかったから	あまり興味がなくなった

② 男子の場合

男子では、「変わった」と回答した学生は5名（20%）、「変わってない」と回答した学生は20名（80%）であった（表6）。

「変わった」と回答した学生の内容（各1名）は次の通りである。

表6 変わったと回答した学生 N=5

例	高校時	大学時
1	自分が何も考えてなかった	客観的に20代のすることではないと思う
2	ノリで撮っちゃおう	もういい年だから恥ずかしい
3	興味がなかった	誘われて一回撮ってみたら案外楽しかった
4	なんとなく撮っていた	いろいろな機械を試したくなった
5	写真を残す手段としてプリクラは手軽だった	デジカメがあるためほとんど必要なくなった

結果から、女子の場合は、「プリクラを撮ることが当たり前で楽しむために利用していた」のように、なんとなく撮影して、プリクラの枚数がいわゆる自分の「ステータス」や不特定多数の友人関係から、それが親密な人間関係の「記念」に変化していくことがわかる。男子の場合は、女子と同様に「ノリ」ではあったが、被写体の変化理由（デジカメ）である場合とその年代にプリクラはふさわしいか、という価値観の確立があると思われる。

大学生にとってプリクラは特別な時に記念に利用するものであり、日常では、携帯カメラやデジタルカメラを利用しているということであった。

デジタルカメラを持っていない高校生にとってプリクラは、記念に残す手段として手軽であり、楽しむために日常的に利用しているといえよう。

1. プリクラを撮るときに意識していることについて
2. プリクラシールの活用
3. 容姿についてプリクラに写っている自分と本来の自分の好き嫌い

2) 高校生と大学生のプリクラに関する意識の相違

(1) 女子

以上で見てきたとおり高校時のときと比べ、プリクラに対する意識が大きく異なっていた。そこで、次からは高校生と大学生の意識の相違を男女別にみていくこととする。

女子高校生と女子大学生の間に大きな違いがプリクラに関してみられたのは以下3点である。この中から、1と2について述べることにする。

① プリクラを撮るときに意識していることについて

プリクラを撮るときに意識していることについて①表情、②ポーズ、③服装やメイクなどの容姿、④全員がきちんと画面に入りきっているかという項目でそれぞれ、「かなり意識している」「意識している」「あまり意識していない」「意識していない」の4つの選択肢を設け、回答を求め

た。その結果は、以下の通りであった(図1)。

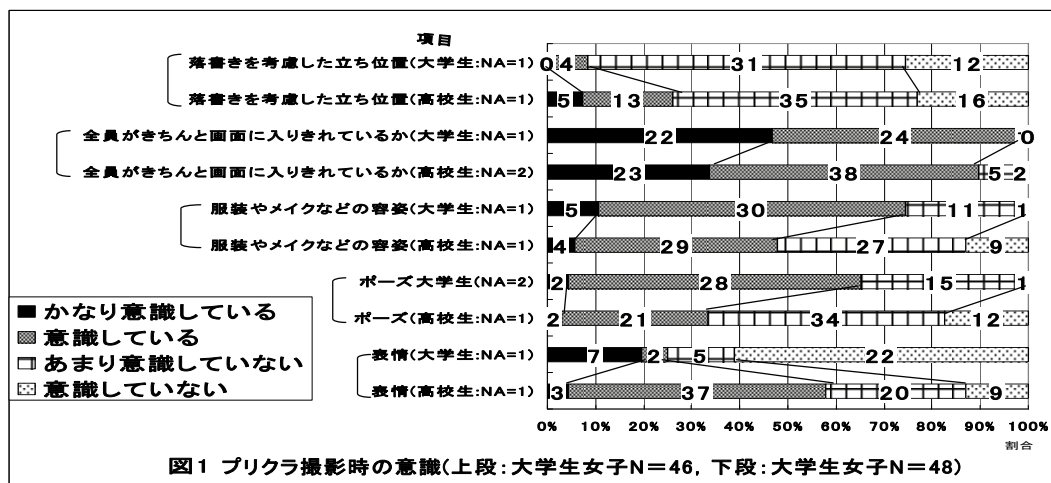
② プリクラシールの活用

「プリクラシールはどのように活用しますか」という質問に対して「何にも活用せず放置する」「ものに貼る」「交換する」「プリクラ帳に貼る」「その他」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、高校生では、「何にも活用せず放置する」と回答した生徒が39名(47%)、「ものに貼る」と回答した生徒が31名(37%)、「プリクラ帳に貼る」と回答した生徒が6名(7%)、「交換する」と回答した生徒が5名(6%)、「その他」と回答した生徒が2名(3%)であった。

大学生では、「何にも活用せず放置する」と回答した学生が24名(37%)、「ものに貼る」と回答した学生が21名(32%)、「交換する」と回答した学生が11名(17%)、「プリクラ帳に貼る」と回答した学生が9名(14%)、「その他」と回答した学生はいなかった。

この結果から、高校生では「物に貼る」「プリクラ帳に貼る」などが多かった。しかし、何も活用せず放置する数が高校生・大学生ともに多く、「プリクラ帳に貼る」が以外に少ないことがわかった。この「プリ帳」によるコミュニケーションは、プリクラの第一次ブームである1997年から第二次ブームである2002年の間のプリクラ離れを食い止めたといわれている。これほど、若者の間で当たり前のように行われていたことだが、この調査結果からはそれほどでもないという結果で



あった。プリクラを介したコミュニケーションの方法は変化したと考える。

(2) 男子

男子高校生（N=50）と男子大学生（N=25）の間に違いが多数みられた中で、次の4点についてみていくことにする。

男子の結果から、女子でのそれとは得られない結果があった。

1. プリクラの好き嫌いとその理由
2. プリクラ撮影による相手との親睦
3. プリクラ利用時の発言（会話）について
4. プリクラを撮る時に意識していることについて

① プリクラの好き嫌いとその理由

「プリクラはおもしろいですか」という質問に対して「かなりおもしろい」「まあおもしろい」「あまりおもしろくない」「おもしろくない」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、高校生男子は、「かなりおもしろい」「おもしろい」が高校生28名（52%）と半数を越え、大学生男子は8名（32%）であったのに過ぎない。逆に大学生男子は、「あまりおもしろくない」「おもしろくない」が合計17名（68%）であった。そこで、その理由を探ってみた。

② プリクラの好き嫌いの理由

a. おもしろい理由

プリクラが好きな人のうち、「プリクラがおもしろい理由は何ですか（複数回答）」という質問に対して「記念になる」「きれいに写る（目デカ・美白効果等）」「自分を表現できる（表情・ポーズ・背景・落書き等）」「撮影時の会話が楽しい」「その他」の5つの選択肢を設け、複数回答を求めた。

その結果、高校生（N=26）では、「記念になる」と回答した生徒が25名、「自分を表現できる（表情・ポーズ・背景・落書き等）」と回答した生徒が6名、「きれいに写る（目デカ・美白効果等）」と回答した生徒が4名、「撮影時の会話が楽しい」と回答した生徒が2名、「その他」と回答した生徒が1名であった。

大学生（N=8）では、「記念になる」と回答し

た学生が6名、「撮影時の会話が楽しい」と回答した学生が3名、「自分を表現できる（表情・ポーズ・背景・落書き等）」「きれいに写る（目デカ・美白効果等）」がそれぞれ1名で、「その他」はいなかった。

b. おもしろくない理由

プリクラが嫌いな人のうち、「プリクラがおもしろくない理由は何ですか。」という質問に対して「写真などの撮影自体に興味が無い」「値段が高い」「撮影過程が面倒だ」「プリクラの加工（目デカ・美白効果等）が嫌い」「その他」の5つの選択肢を設け、複数回答を求めた。

その結果、高校生（N=24）では、「写真などの撮影自体に興味が無い」と回答した生徒が11名、「値段が高い」と回答した生徒が9名、「撮影過程が面倒だ」と回答した生徒が5名、「プリクラの加工（目デカ・美白効果等）が嫌い」と回答した生徒が3名、「その他」と回答した生徒が3名であった。

大学生（N=17）では、「撮影過程が面倒だ」と回答した学生が7名、「値段が高い」と回答した学生が6名、「プリクラの加工（目デカ・美白効果等）が嫌い」「その他」と回答した学生がそれぞれ4名、「写真などの撮影自体に興味が無い」と回答した学生が3名であった。

①と②の結果から、高校生は大学生に比べプリクラが好きであり、その理由は「記念になる」が多かった。その反面プリクラが嫌いな高校生と大学生はプリクラ撮影にそもそも興味が無いか年齢とともに興味が薄れていくことがわかった。興味深いのはプリクラの特有である「プリクラの加工（目デカ・美白効果等）」に対する価値観の賛否がプリクラ撮影をする直接的な要因であろう。また、プリクラが「自分を表現できる」というツールとしてもとらえている。しかし、若者はそれでもプリクラ撮影するのであるから、他にプリクラ撮影をする理由がないか考えた結果、プリクラ撮影による相手との親睦—会話やその内容について考察する必要があると思われる。そこで、どんな会話をしているのかを質問紙の回答でみてみることにする。

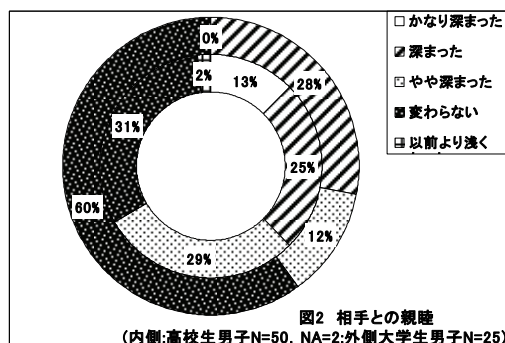
2. プリクラ撮影による相手との親睦

1) プリクラ撮影による相手との親睦の深まり

「プリクラ撮影によって相手との親睦は深まりましたか」という質問に対して「かなり深まった」「深まった」「やや深まった」「変わらない」「以前より浅くなった」の5つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、高校生 (N=50:NA=2) では、「かなり深まった」と回答した生徒が6名 (13%)、「深まった」と回答した生徒が12名 (25%)、「やや深まった」と回答した生徒が14名 (29%)、「変わらない」と回答した生徒が15名 (29%)、「以前より浅くなった」と回答した生徒が1名 (2%)であった (図2)。

大学生 (N=25) では、「かなり深まった」と回答した学生はおらず、「深まった」と回答した学生が7名 (28%)、「やや深まった」と回答した学生が3名 (12%)、「変わらない」と回答した学生が15名 (60%)、「以前より浅くなった」と回答した学生はいなかった (図2)。



高校生の場合、プリクラによって親睦が深まったと感じているのが約7割であることから、プリクラには、より仲間意識を持ち、一体感を得ることができる機能があることが分かった。大学生の場合はプリクラを契機に親睦が深まるのではなく、その前の人間関係がすでに出来上がっているものと考えられる。

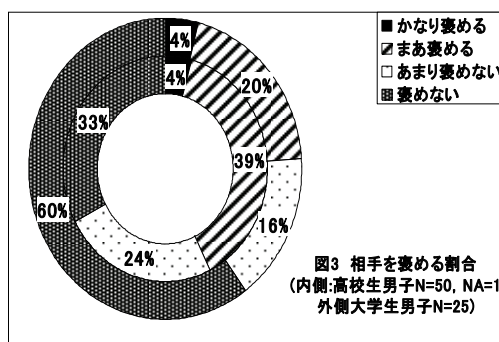
2) プリクラ撮影による相手の内面のよさについて

「プリクラ撮影によって相手の内面について褒めるようになりましたか。」という質問に対して「かなり褒める」「まあ褒める」「あまり褒めない

い」「褒めない」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、高校生 (N=50:NA=1) では、「かなり褒める」と回答した生徒が2名 (4%)、「まあ褒める」と回答した生徒が19名 (39%)、「あまり褒めない」と回答した生徒は12名 (24%)、「褒めない」と回答した生徒が16名 (33%)であった (図3)。

大学生 (N=25) では、「かなり褒める」と回答した学生が1名 (4%)、「まあ褒める」と回答した学生が5名 (20%)、「あまり褒めない」と回答した学生が4名 (16%)、「褒めない」と回答した学生が15名 (60%)であった (図3)。



高校生は相手を少し褒めることがあっても、大学生の場合は、外見について相手を褒めることはないのである。いずれにしても、プリクラ撮影時は、会話が頻繁に行われており、プリクラは気軽にコミュニケーションをとることができる身近な手段であり、その場所は共有の場ともいえる。

3. プリクラ利用時の会話内容とその意識について

プリクラ利用時の会話内容を若者が日常会話の中で普段使用しているであろう「かわいい」「かっこいい」「楽しい」「ポーズ」「フレーム・背景」とし、それぞれの意識について回答してもらった。

1) かわいい

「プリクラを撮影するとき、どのくらい「かわいい」と言いますか」という質問に対して「かなり言う」「まあ言う」「あまり言わない」「言わない」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、高校生では、「かなり言う」と回答した生徒が5名（11%）、「まあ言う」と回答した生徒が13名（29%）、「あまり言わない」と回答した生徒が10名（22%）、「言わない」と回答した生徒が17名（38%）であった（図4）。

大学生では、「かなり言う」と回答した学生が0名（0%）、「まあ言う」と回答した学生が5名（20%）、「あまり言わない」と回答した学生が5名（20%）、「言わない」と回答した学生が15名（60%）であった（図4）。

2) かわいい

「プリクラを撮影するとき、どのくらい『かわいい』と言いますか」という質問に対して「かなり言う」「まあ言う」「あまり言わない」「言わない」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、高校生では、「かなり言う」と回答した生徒が6名（13%）、「まあ言う」と回答した生徒が11名（24%）、「あまり言わない」と回答した生徒が12名（27%）、「言わない」と回答した生徒が16名（36%）であった（図4）。

大学生では、「かなり言う」と回答した学生が0名（0%）、「まあ言う」と回答した学生が4名（16%）、「あまり言わない」と回答した学生が6名（24%）、「言わない」と回答した学生が15名（60%）であった（図4）。

3) 楽しい

「プリクラを撮影するとき、どのくらい『楽しい』と言いますか」という質問に対して「かなり言う」「まあ言う」「あまり言わない」「言わない」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

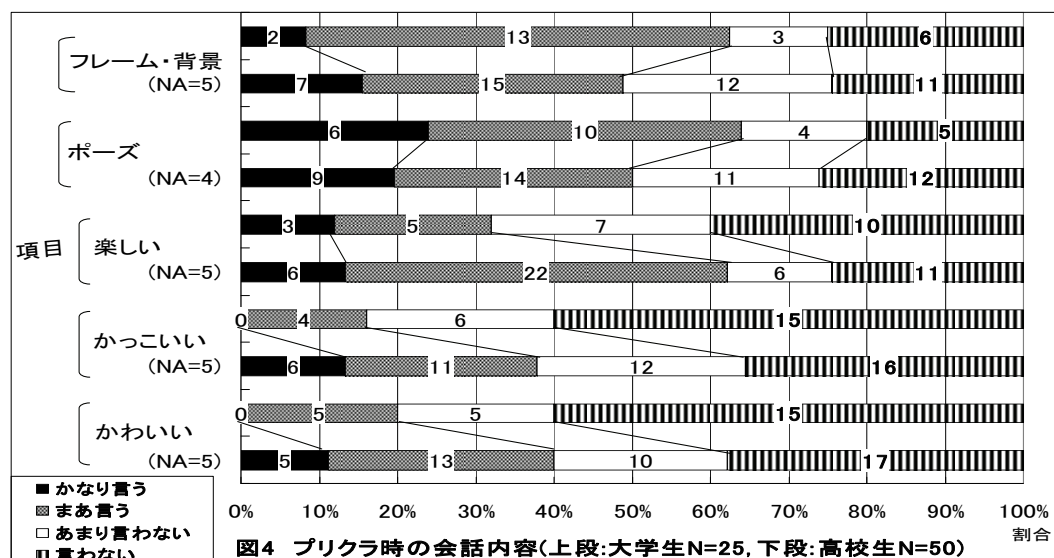
その結果、高校生では、「かなり言う」と回答した生徒が6名（13%）、「まあ言う」と回答した生徒が22名（49%）、「あまり言わない」と回答した生徒が6名（13%）、「言わない」と回答した生徒が11名（25%）であった（図4）。

大学生では、「かなり言う」と回答した学生が3名（12%）、「まあ言う」と回答した学生が5名（20%）、「あまり言わない」と回答した学生が7名（28%）、「言わない」と回答した学生が10名（40%）であった（図4）。

4) ポーズ

「プリクラを撮影するとき、ポーズの話をするどのくらいしますか」という質問に対して「かなり言う」「まあ言う」「あまり言わない」「言わない」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、高校生では、「かなり言う」と回答した生徒が9名（20%）、「まあ言う」と回答した生徒が14名（30%）、「あまり言わない」と回答した生徒が11名（24%）、「言わない」と回答した生徒が12名（26%）であった（図4）。



大学生では、「かなり話す」と回答した学生が6名(24%)、「まあ話す」と回答した学生が10名(40%)、「あまり話さない」と回答した学生が4名(16%)、「話さない」と回答した学生が5名(20%)であった(図4)。

5) フレーム・背景

「プリクラを撮影するとき、フレーム・背景の話をどのくらいしますか。」という質問に対して「かなり言う」「まあ言う」「あまり言わない」「言わない」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、高校生では、「かなり言う」と回答した生徒が7名(16%)、「まあ言う」と回答した生徒が15名(33%)、「あまり言わない」と回答した生徒が12名(27%)、「言わない」と回答した生徒が11名(24%)であった(図4)。

大学生では、「かなり言う」と回答した学生が2名(8%)、「まあ言う」と回答した学生が13名(52%)、「あまり言わない」と回答した学生が4名(16%)、「言わない」と回答した学生が6名(24%)であった(図4)。

高校生、大学生ともに「フレーム・背景」「ポーズ」「楽しい」のことを言うことが多いのは、プリクラ撮影の時間を楽しんでいるといえる。このように、プリクラ特有の機能を楽しんでいる上、発言や会話も多く、プリクラ利用時に多くコミュニケーションが図られていることが分かる。

4. プリクラを撮る時に意識していることについて

では、プリクラ撮影時における会話は通常の会話と違いがないのだろうか。撮影時の会話もプリクラのコミュニケーションとしての機能を大きく果たしているのではないかと考えた。そこでの会話発信時の元となる撮影時にどのような意識し、撮影者の気持ちの変化についてはどういう意識をもっているのか、以下のような質問紙調査をした。

1) 表情

「プリクラを撮影するとき、表情について意識していますか」という質問に対して「かなり意識

している」「意識している」「あまり意識していない」「意識していない」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、高校生では、「かなり意識している」と回答した生徒が3名(6%)、「意識している」と回答した生徒が16名(33%)、「あまり意識していない」と回答した生徒が13名(26%)、「意識していない」と回答した生徒が17名(35%)であった(図5)。

大学生では、「かなり意識している」と回答した学生が4名(16%)、「意識している」と回答した学生が10名(40%)、「あまり意識していない」と回答した学生が4名(16%)、「意識していない」と回答した学生が7名(28%)であった(図5)。

2) ポーズ

「プリクラを撮影するとき、ポーズについて意識していますか。」という質問に対して「かなり意識している」「意識している」「あまり意識していない」「意識していない」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

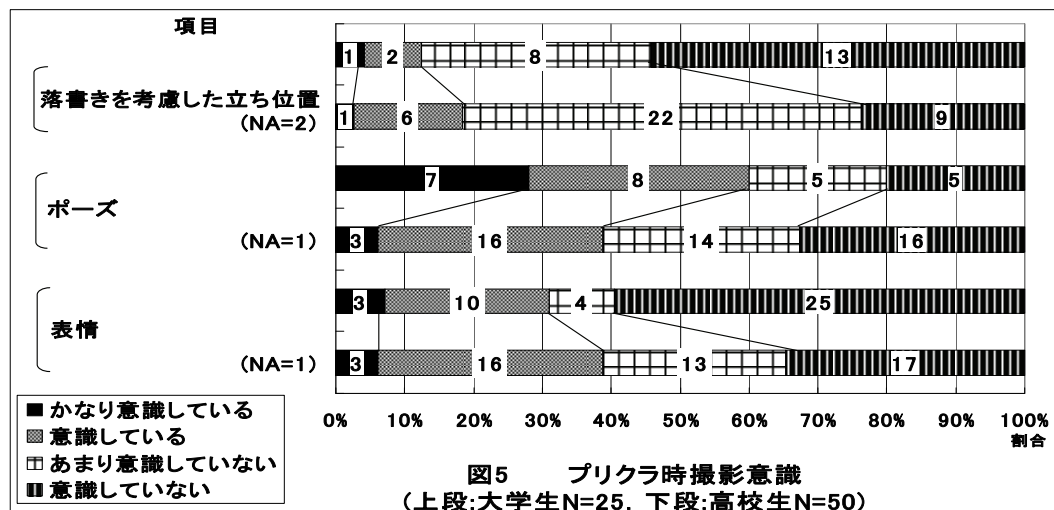
その結果、高校生では、「かなり意識している」と回答した生徒が3名(6%)、「意識している」と回答した生徒が16名(33%)、「あまり意識していない」と回答した生徒が14名(28%)、「意識していない」と回答した生徒が16名(33%)であった(図5)。

大学生では、「かなり意識している」と回答した学生が7名(28%)、「意識している」と回答した学生が8名(32%)、「あまり意識していない」と回答した学生が5名(20%)、「意識していない」と回答した学生が5名(20%)であった(図5)。

3) 落書きを考慮した立ち位置

「プリクラを撮影するとき、落書きを考慮した立ち位置について意識していますか。」という質問に対して「かなり意識している」「意識している」「あまり意識していない」「意識していない」の4つの選択肢を設け、回答を求めた。

その結果、高校生では、「かなり意識してい



る」と回答した生徒が1名（2%）、「意識している」と回答した生徒が6名（12%）、「あまり意識していない」と回答した生徒が22名（46%）、「意識していない」と回答した生徒が19名（40%）であった（図5）。

大学生では、「かなり意識している」と回答した学生が1名（4%）、「意識している」と回答した学生が2名（8%）、「あまり意識していない」と回答した学生が8名（34%）、「意識していない」と回答した学生が13名（54%）であった（図5）。

高校生・大学生ともに、「表情」「ポーズ」が上位にきており、「面白く」「楽しく」撮影する目的があると考えられる。大学生は特に「ポーズ」にこだわる傾向がある。つまり、表情や服装、ポーズを変えることで、自己表現ができ、撮影したシールや画像を人に見せることで自己開示ができると思われる。こうした意味では、プリクラは自己表現の場となっている。また、「立ち位置」は女子の場合と同様、年齢を重ねるに従い、自己中心性から全体的フレームとしての視野が広がっていくと考えられる。

5. 全体的をとおしての考察

プリクラは自己表現の場ともなっている。プリクラ撮影時には、女子は、表情、服装、メイクなどの容姿、男子は、表情、ポーズなどを特に意識

しているという結果であった。撮影時には、ポーズやフレーム・背景の話を約7割の生徒が「かなり話す」「まあ話す」と回答しており、撮影者との会話も頻繁に行われていることがわかった。そして、約7割の生徒がプリクラを撮影することで、相手との親睦が深まったと回答している。幼少期は内遊び中心、そして携帯電話やインターネットが普及した時代に生まれたことで、コミュニケーション不足が懸念されている現代の若者にとって、プリクラは安易にコミュニケーションをとることができる手軽で身近な手段であるといえる。

さらに、男子に対して女子の方がプリクラの利用に積極的であった。女子がプリクラ好きなのは、人との繋がりにあると考えられる。プリクラを撮る時は必ず相手がいる。撮影後もプリクラを見返すことでつながりを再認識できる。プリクラを交換、インターネット上に公開することで自己開示ができる。これらを女性が好んだことから、プリクラは男性よりも女性に受け入れられたのだと考えられる。また、プリクラ撮影時に高校生が「ポーズ」など自己中心的であったことから、大学生になると全体の「立ち位置」を意識する傾向が見られたのが特徴的な結果であった。

数年前まで多くの女子中高生が所持していたプリクラ帳は、現在の高校生はあまり所持していないことが分かった。プリクラ撮影後のシールや画

像の活用法については、シールは「何にも活用せず保存する」という回答が多かった。プリクラ帳を作り、交換・収集するということが主だった以前の使い方とは違い、現在ではSNSの多様化、スマートフォンの普及によってプリクラシールの必要性が低下していることが分かった。さまざまなことがインターネットや携帯電話でできるようになり、人と会話することなく、情報交換ができるようになった。このことは、若者のコミュニケーション能力の低下にさらなる拍車をかけることになると考えられる。グループ学習や地域との連帯を図るなど人と関わり合いながら学習ができる教育形態、教育内容を抜っていく必要があると考える。

そして、携帯電話やインターネットが子どもや若者に普及したことにより、出会い系サイトなどを介した犯罪、プライバシー侵害などの被害が増加した。今後、携帯電話やインターネットの危険性や使用法について指導していく必要がある。

インターネットや携帯電話の普及はプリクラシールの必要性を低下させている。なぜならば、プリクラの持っている収集・交換・共有という機能が無く、個別化の特化であるからである。

個別化・特化になることによって、若者文化をなくしてしまう恐れもある。若者文化がなくなることは、若者のよりどころを失ってしまうことにもなりかねない。若者文化は若者が自立し、大人になるために必要なことであると考え。自分たちでこれらの文化を生み出す力をつけるとともに、若者に若者特有の文化のきっかけや場、協働・協同の作業を大人が提供すること(介入ではなく)が必要だと考える。

引用文献

- 1)内閣府自殺対策推進室 平成23年の自殺状況について pp. 1-4
内閣府 平成24年版自殺対策白書 第1章 (インターネット開示)
- 2)森下育代, 2012, 小さな花の種一つの命だからー東日本大震災・福島原発事故から平和を考える NPO法人家庭科教育研究者連盟編 芽ばえ社 pp. 30-35

- 3)栗田宣義, 1999, プリクラ・コミュニケーションー写真シール交換の計量社会的分析ー マスコミュニケーション研究No. 55 pp. 149-150
- 4)坂田悠夏, 2007, プリクラの社会的機能と流行・定着の背景, 一橋大学

参考文献

- 1)原野直也, 1997, プリクラ仕掛け人の素顔ープリクラが平成最大の集客マシーンへ進化した理由, メモル出版
- 2)岩田考・羽瀨一代・菊池裕生・苫米地伸, 2006, 若者たちのコミュニケーション・サバイバルー親密さのゆくえー, 恒星社厚生閣
- 3)加藤裕康, 2011, ゲームセンター文化論ーメディア社会のコミュニケーション, 新泉社
- 4)宮本友弘・田中敏, 1997, 心理的無組織化症候群(PDOS)の研究Ⅱ: プリクラに見るコミュニケーションの変質, 日本教育心理学会総会準備委員会
- 5)中西新太郎, 1997, 子どもたちのサブカルチャー大研究, 旬報社
- 6)中西新太郎, 2004, 若者たちに何が起きているのか, 花伝社
- 7)佐伯胖・中西新太郎・若狭蔵之助, 1996. 9. 25, フレネの教室2 生活から学びへ, 青木書店
- 8)高橋勝・荒井聡史・前川幸子・藤井佳世・後藤さゆり・川久保学, 2011, 子ども・若者の自己形成空間ー教育人間学の視線から, 東信堂
- 9)辻大介, 1999, 若者の人間関係は「希薄化」したのか, 東京大学新聞

その他

- 1)日経産業新聞, 2003. 1. 24, 経営戦略考
- 2)読売新聞, 2012, 5. 8